Sさんの一言

能田秀一

「能田さん……。ひにちがくすりですよ……。」というたったの一言で、私の〝痛める心〟が即座に癒やされたという思い出話である。

私の先輩Sさんは六十四歳であるが、年より少くとも十歳は若く見える。見えるだけでなく心も事実十歳は若いものをもっておられる。若い頃は勤めから帰宅して、奥さんが心をこめて用意された夕げのカレーライスを、ちょっと気にくわぬことがあれば皿ごと投げつけられたこともあったというような、人も知る短気者であったが、今は最も繁忙な役職であるにもかかわらず、忙中閑のことわざどおり優雅で円満、人の信望をあつめておられ、その上信仰心があつい。奥さんは、おっとりとふくよかで、気品が高く教養が深く、当節第一等の夫人と婦徳のほまれが高い。私どものもって範とするご夫婦である。

さて話しはさかのぼる。昭和三十二年、つまり十三年前のある夏の日、私は満二歳になったばかりの、かわいいさかりの長女を、親のちょっとした不注意で亡くしてしまった。その前の日、赤く夕焼けした田舎の野道を、私は上半身裸で、ヨダレかけ一つ掛けたその子をおんぶして散歩したが、いまなおその子の体のぬくもりは、私の背中にあり、夕空にトビが輪をかいていたことなども記憶に鮮やかである。

葬送のあと、知人がかわるがわる失意の私を、いろいろの言葉と手段で、慰め励ましてくれたが、正直にいって余りにもしらじらしく思われ、私の心を打つものがなかった。それどころか、かえって何を見ても、何を聞いても、何をしても耐えられない程に胸が痛かった。

こんな時、この胸の痛みを不思議な力で癒してくれたのが、冒頭に書いたSさんの一言であったのである。私は会葬いただいたお礼にSさんの部屋に伺った。執務中のSさんは私に椅子をすすめながら、ご自身も机から立って、私の前に腰をおろされた。そしてやわらかな微笑をたたえ、静かに、ゆっくりと「能田さん……。ひにちがくすりですよ……。」とそれだけいって口をとざされ、あとはやさしいまな差しで、私を包むようにしておられるだけであった。そのあたたかさに包まれながら、しばらくして私は、腹の底から、すすり上げるように大きな息をついたことを覚えている。そうしてつぎの瞬間、私の〝痛める心〟は癒えていったのである。

いらい、このことは私の人生にとって忘れることの出来ない、ありがたくも不思議なこととして、心の中で鼓動しつづけて来たのである。

話しは降って昭和四十五年一月のある日、Sさんは、ふとしたことから例によって静かな口調で、「死児の年をかぞえるわけではないが、自分が物心両面で最も苦難の時代になくした女の子が、もし生きていたらもう四十歳近くになっているかなぁ。家内はいまだにその子の病気のとき、私の思いやりが足りなかったといってはグチをこぼす……」と、その女のお子さんのなくなられた時のことについてしんみりと人に話しておられるのを、たまたま同席した私も聞いた。

その瞬間、十三年前、失意のどん底にあった私を、一言をもって救っていただいたことを想起し、これだ、無造作とも思われたあの時の一言のなかには、こんな人生経験が集約されていたのだ。それだからこそ多言を要せずに、私の心を射て、私を救ってくれたのだとつくづく思いしらされた。それと同事にかねて、言わず語らずのうちにも、的確に私ども後輩に進む方向を示し、ある時は忠告を与えていただくその秘決は、Sさんの人生経験の深さであると感じ入ったのである。

（熊本日日新聞社事業部長）

舞踊譜

鈴木小筆

もう十五年か二十年にもなるだろうか舞踊譜というものが用いられるようになった。私ども舞踊家にとって、これは非常に便利で、しかもだんだん記憶が鈍ってくる年頃になると、忘れていた振りをあれこれと思い出そうと苦労しなくても、ひかえている帳面をみればすぐにわかり、非常に重宝するものである。しかし、これは洋楽の楽譜のように曲目の譜を店に売っているというのではない。あくまで自分でこしらえて、自分のためにひかえておくものである。

踊りを教わる場合、教わった振りをすぐ譜に書く場合と、まず踊りを見て振りをノートし、それから教わる場合とある。こういうことは勿論、名取級以上の人達の教わり方なのであるが、さてこんな便利な舞踊譜なるものを用いるようになったから踊りもさっとおぼえて、より芸術度が高くなったかというと必ずしもそうではない。むしろ譜に頼りすぎて、自分でおぼえようとしないため、舞踊譜ノートを車の中にでも忘れようものなら一大事である。

踊りというものは手振り、足の運びと振り付の順を追って曲が終わると同時に踊り終わればそれでよいというものではないからである。振りを完全に憶えた上で、もう一度その歌詞なり、曲の意味をよく味わいなおし、そうする事によって心が入り、内面的な雰囲気を踊りの中にとけ込ませながらいくども踊り込むうちに、間（ま）というものが微妙に生きてくる。心が入ると、肩の落し方や、目の移し具合、足の運びなどにしても、間を保つことが出来るようになる。そして身体が完全にこなれ、心が入り、間のもてる踊りになれば踊っている者自身、踊りそのものの心境になって、見物人も何者もなくなるのである。そうなると見ている人もジーンと何か打たれるものがあるはずである。ここまでゆくと、芸術度は最高であるが舞踊譜だけでは完全に踊れるようにはならないのでそれからさきは師匠に意見をもたず、素直に教わる心となり、なおしてもらうほかに方法はない。自分で自分の姿は見えないからである。

現代は何でも便利な世の中になり、物の考え方もドライになって明るくなったとはいうものの、同じことばを話すにしても、自分の気持を相手に伝えさえすればよいものではなくその調べなり、ニュアンスなりが相手に良い感じを与え、しかも正しく伝えられるかどうか。それには口さきだけ柔かくても誠実な心が入っていなければ駄目である。つまりことばや動作が芸術にならないのである。こういう日常的な事は誰しもあまり研究しないけれどもあるいはしている方もあるだろうが、私自身よく家族の者を怒らせたり、年老いた親に心配させるようなことを口にしたりしてしまって、あとから後悔する事がしばしばであるが、世間でいう親子の断絶とか、芸術にたずさわる者同志の醜い出来事とかを見たり聞かされたりするにつけ、やはり自分の姿は自分ではわかぬものだなあと、つくづく考えさせられる。

（舞踊家）

アチラ語をめぐって

山口白陽

スーパーマーケットが普及して、どこも手軽に買物ができるので、このごろ屋台の行商はめっきり影をひそめた中に、時たま自作の野菜類を手押しの車で売りにくる小母さんがいる。

長い間出入りしているので私などまで顔なじみになったが、以下家人からの受け売り話である。

小母さんの野菜は畑からとり立てだけに、新鮮なのが何よりの取り柄だが、殊にこのごろ持ってくるジャガイモは身がしまって舌ざわりがいいと好評である。小母さんにそういうと、彼女は得意げに

「そらあァた、あのジャガは八目くるりVちうて、目の玉んでんぐり返やるごつうまかつですもん」

といった。夕食の時、その話が出ると、高校生の娘がブッと吹き出して

「目くるりだなんて、あれはメイ・クイーン（May Queen 五月の女王）という種類なのよ」

「なるほど、メクリルとメイクイン、似てるもんなァ」

と皆大笑いした。

それにしてもこの小母さんユーモラスな訳語をつけたものだが、こんな例はほかにも少くないようだ。

亡くなった池田勇人首相が、エチケットをエケチットといって議会?の話題になったことはご承知のとおり、

「なにケのおきどころがチッとちがっただけじゃないか」

と、放言居士は笑いとばしたことだろう。その位のことを気にするようじゃ総理大臣なんて一日も勤まるもんじゃない。

総理大臣といえば、故吉田茂氏は東大の学長をつかまえて「曲学阿世の徒」とキメつけたり、カメラマンにコップの水をぶっかけたり、とかく傲岸不遜の評が高かったが、それでいて案外憎まれなかったのは一面なかなかのユーモリストだったからだ。

「あなたは随分お元気ですが、ふだんどんなものをお召上りですか」

という質問に

「なにせ人を食ってるからね。」

と答えた話があるが、このユーモアは多分氏の本音だっただろう。

その吉田氏が外国でのある国際会議に出席する時、開会間ぎわにかけつけたのはいいが、折あしく尿意を催してがガマンが出来ず、会場に着くなり

「ラヴァトリー（便所）はどこ?」

ときいたら、相手もあわてていたか

「ラヴァトリー様ご到着!」

と叫び一座の注目を集めたというが、これも恐らくご当人のつくり話だろう。

ところで、このごろウーマンリヴということばがジャーナリズムに氾乱している。つい先ごろはやったウーマンパワーの一変形で、ウーマン・リヴェレーション（女性解放）の略だという。

私たちのように外語に弱いものにとって、最近の外語ばやりは、流行語だけでも追っついてゆくのはむずかしい。紙面改善を売り物にしている新聞など、新語解説のコーナーを常設して庶民を啓蒙することがぜひ望ましいと思う。

いつやら阿蘇町の河崎前町長が、教育庁の公文書に英語が多過ぎると抗議したのをおぼえているが、無理もない。といってもことばは生きものである。殊にこう世界が狭くなると、外語の氾乱も当然の帰趨で、押しとめようとしても不可能であり、せめてもそれを理解させるための努力が、さしずめジャーナリズムなどの使命に入ろう。

敢てジャーナリズムの一考を煩わす、などといえば論文めくが、私はこれでも随筆のつもりである。乞諒焉。

（郷土雑誌〝呼ぶ〟主宰）